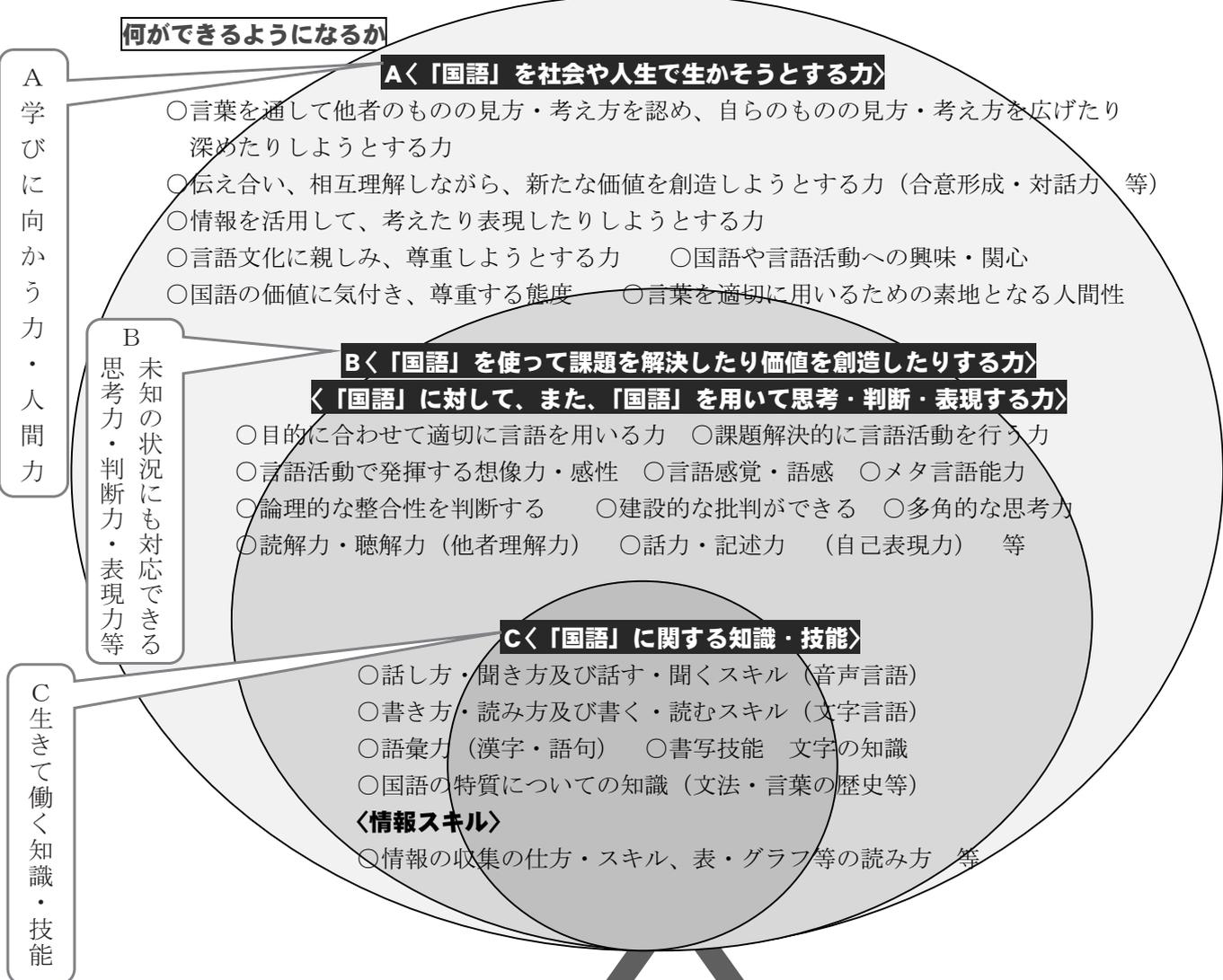


国 語 科

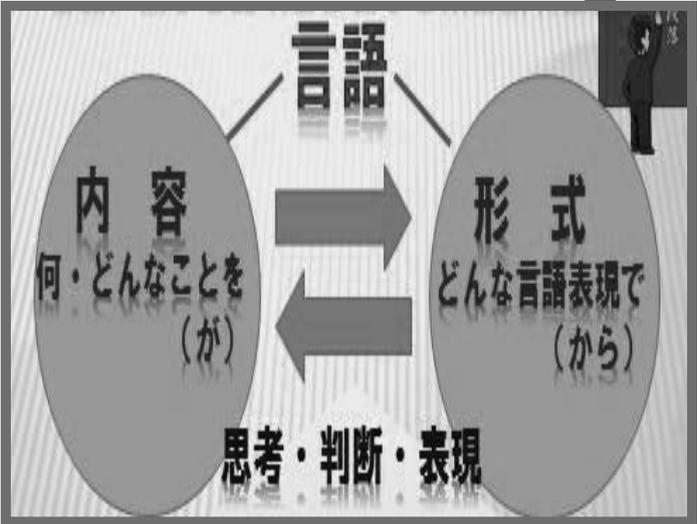
国語科の本質

国語科で育成すべき資質・能力＝言葉を適切に使って生きる力



何を学ぶか

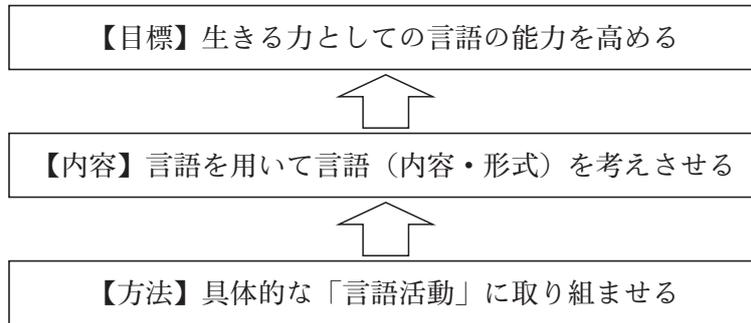
どのように学ぶか



**言葉に対する思考が
活性化する言語活動**

言葉に対して深い思考を促す活動
言葉を使って深い思考を促す活動
主体的・対話的な言語活動
(話す・聞く・書く・読む)

国語科の役割は「言語（国語）の能力」を高めることである。そのため国語科の授業では言語活動の中で言語（国語）を大事にしながら、言語（国語）の内容と形式について思考・判断し、言語（国語）で表現させることが必須である。



2 国語科において育てたい資質・能力

左図は国語科における学びを図にしたものである。上部の同心円は国語科で育成したい資質・能力、つまり言語能力である。言語は互いのコミュニケーションツールになるということももちろんある。しかし、加えて重要なのは、「言語」が私たち一人一人の根幹である思考や感性を支え、つかさどるということである。つまり、言語は生きることと切り離せず、その言語を直接扱う国語科の教員として重責を再認識しなくてはならない。さて、国語科教育の対象である言語は内容と形式を併せもち、ある文脈における言語について内容と形式とを関連づけながら捉えていかなければならない。国語科において扱う「言語」は母語であり、私たちの一部を形成している。したがって、国語科の指導は言葉をベースとした精神性や人間性等、21世紀を生き抜く力に関わっていくことになる。

さて、左図の上部は国語科で育成したい資質・能力であるが、この内側の円から順に〈「国語」に関する知識・技能〉〈「国語」を使って課題を解決したり価値を創造したりする力〉〈「国語」に対して、また、「国語」を用いて思考・判断・表現する力〉〈「国語」を社会や人生で生かそうとする力〉に大別している。これはそれぞれ新しい時代に必要とされる資質・能力「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」に対応させたものである。まず、「基礎的な知識及び技能」は、漢字が書ける、言葉の決まりが分かる、読み書きのスキルをもっている、辞書が引ける、必要な情報を検索できるなど、運動技能や楽器の演奏技術のように、一定のトレーニングで鍛えられる力である。次の「思考力・判断力・表現力」は、それら基礎的・基本的な知識及び技能を課題解決や目的達成の必要に合わせて活用する際に発揮すべき、言葉で、あるいは言葉に対して思考し判断し表現する力である。最終的に国語科が目指すべきは、どんな状況に対しても自らの言葉の力を駆使して一人一人がよりよく生きていけるようにすることである。

3 国語科の本質に迫る授業づくり

このように、国語科の授業は「言語（国語）の能力」を高めるために行い、裏を返せば「言語（国語）の能力」を高めなければ国語科の授業とはいえないことになる。ここでいう「言語の能力」とは、左図の上部に列挙したような資質・能力であり、具体的には、学習指導要領の各領域等の指導事項として示されている力である。これらをバランスよく系統性をもって高めていくことが国語科の使命である。ところが、国語科が扱う言語は幼い頃より自然習得し、ほぼ無意識に用いているため、学習の必要性や高まりを実感させにくい。付いた資質・能力を実感しにくい。これがときに指導の曖昧さを招くこともある。「知識及び技能」だけなら、一方的な講義や繰り返し練習でも一定まで高めることができる。指導もしやすい。しかし、「思考力等」はそうはいかない。適切な題材等を用いて、具体的な場面や言語活動を設定し、その中で課題解決的に思考・判断・表現をさせなければならない。これが国語科の難しいところでもあり、やりがいでもある。付けるべき資質・能力の発揮が要求される言語活動、知的好奇心や感性が揺さぶられる内容、そして、生徒が主体的・対話的に課題解決を図っていくような学習方法を、教材研究段階で十分吟味し、授業として実践していくこと、それが「国語科の本質に迫る授業づくり」と考え、授業研究に取り組む。

実践事例 1

第1学年「B書くこと」の実践

1 単元

「体験したことを伝えよう—金沢フィールドワークについて報告する文章を書く—」

2 国語科の本質と本実践の関わり

生徒の実態として、感想文や意見文等、さまざまな文種の文章を書いた経験があるが、誰に読んでもらうために書いたのか、何のために書いたのかという点については、意識が薄いということが挙げられる。このことから推測されるのは、事実と感想の区別がついていなかったり、読み手への配慮が欠けているために分かりにくかったりする文章を書いていたということである。そこで、本実践では次のような姿を目指して指導を行った。

○相手（読み手）を意識することにより、書くべき内容を考えて書くことができる。

○書く目的に応じて、公正さや客観性をもたせて書くことができる。

読み手にとって役に立つ文章にするためには、想定する読み手を分析し、知っていることや経験の有無を予想しなければならない。また、読み手が読む目的を考えれば、主観的な判断ではなく、一定の公正さや客観性をもった内容を書くことが求められる。相手や目的に応じて内容を考えて書く力は、国語科で養うべき能力であり、本質である。「その情報は相手に本当に必要なのか」「それはどんな役に立つのか」という問いかけによって、言語内容と言語形式が往復する思考が生まれ、本質に迫ることができるのではないかと考える。

実践力	社会参画力 読み手にとって必要とされる文章を書く。
思考力	相手に応じて書くべき内容を考える。
基礎力	必要なことが相手に伝わるように、適切に書く。

3 実践

(1) 単元について

本単元は、4月下旬に体験した金沢市内班別学習フィールドワーク（以下FW）を報告する文章を書くという「書くこと」の単元である。本単元の設定は次のとおりである。

今年度の宿泊学習では、附属中学校では初めてとなる金沢市内での班別学習（FW）を行いました。初め

での学習だったので、昨年までの資料もなくて準備するのが大変だったのではないのでしょうか。そこで、来年度の1年生がFWの計画を立てるときに参考にしてもらい、FWがより充実したものになるように、みなさんが体験したことを書いて伝えましょう。

「書くこと」の学習では、書く場面の設定が重要である。生徒にとって、書く必要性が薄かったり、相手が曖昧だったりすると、書く内容も曖昧になり、書かれていることが適切かどうかという議論が成立しなくなってしまう。また、書く立場も重要である。経験したことがない立場で書かせると、具体的に書くことは難しくなり、抽象論に陥りやすい。

本単元での読み手の想定は、来年度に入学する1年生である。これは書き手にとっては、2ヶ月前の自分たちであり、書く立場を想定することは容易である。また、自分たちが経験した班別学習の失敗やトラブルを基に書くという設定であるため、書く必要性も十分にあると考えられる。

(2) 単元の全体の流れ（全5時間）

- 第1時 体験先や見学先を選ぶときに自分たちが困ったことを振り返り、書くべき内容を考える。
- 第2時 報告する文章にどのような内容をどのように書くべきか考える。…**本時**
- 第3時 前時で考えた内容や書き方を基に、自分たちの班の報告文に書く内容と書き方を直す。
- 第4時 分かりやすい構成を考え、報告文を書く。
- 第5時 報告文を他の班の生徒と読みあい、お互いに評価し合う。

(3) 授業の実際

第1時 まず、小学校での学習経験を確認した。大半の生徒が行事や大会等の報告文を書いていたが、読み手の意識についてはあまりなかったという実態が把握できた。そして、書く内容と目的を伝えたところ、書きたいという内容がたくさん出された。しかし、生徒たちはその全てを書ききれないということに気づき、書く内容を取捨選択しなければならぬということになり、学習の必要性が認識された。

第2時 一つの班を例に、報告文に書く内容を検討する。その班のメンバーが書けばいいと考えた内容を箇条書きにしてまとめたものを配布した。

- 店員さんの説明はとてもわかりやすい。
- 金沢駅から歩いて二〇分ほど。
- ストラップや皿、弁当箱の中から好きなものを選び、

金箔を貼る。

- 思ったより細い道を通らないと行けない。
- 真剣にやらないと、取り返しがつかないことになる。
- 街のほとんどの人が道を教えてくれる。
- 体験の難易度はやや高め。
- 息で金箔が飛ばないようにマスクがあるとよい。
- 金箔を貼った後、ラメを好きなように使える。
- 昼食は近くの名鉄エムザがおすすめ。
- 招き猫や金箔ファイルなどのおみやげがある。

目的と相手、文章の字数(800字)を確認し、必要だと思う内容には○、字数に余裕があれば書いたらいいものに△、書く必要のないものに×をつけさせた。「体験の難易度はやや高め」という内容については、○、×に分かれた。○をつけた生徒は「難易度で選ぶ人もあると思うので、あったほうがいい」、×をつけた生徒は「個人差が大きいから」という理由であった。そこで、書き方を変えることで解決してみようと投げかけたところ、「物作りが好きな人にとっては～」、「楽しいと言っている人が多かった」のように、対象を限定したり事実を述べる書き方にしたりすればよいという結論に至った。また、同じ体験をできる施設が複数ある場合には、同じ項目がないと比較できないという意見が出され、全ての報告文に同じ項目を設けるべきだという結論に達した。

第3時 前時で得られた「客観的に書く」、「同じ項目を設ける」など、誰が読んでも確かだと思えるように書いたり、相手にとって本当に必要と思われることを書いたりするべきだという結論を基準にして、自分たちの班の書く内容を見直した。そして、他の班の生徒と交流する時間を設け、書き手の意図が伝わっているかどうか確認した。

第4時 初めて読む人にとって分かりやすい構成を考えさせた。どの報告文にも共通する部分は簡条書きで書く、小見出しを付けるなどの意見が出された。

第5時 全ての班の文章を読めるようにローテーションを組んで、読み合う時間をとった。訂正した方がいい部分には、付箋を貼って回し読みをした。

4 実践に対する振り返り

(1) 実の場を生かした課題設定と学習活動

本單元では、全員が共通して体験したことを書く材料として設定した。このことは次のような効果があった。

1点目は、書く材料を集める段階、選ぶ段階で全員が話し合えることである。個人が体験したことが報告文の

題材として選ばれることが多いが、体験したのは書いた人だけなので、構成や推敲の指導はできるが、集材や選材の指導は難しい。しかし、本単元の設定では、集材段階で「このことを書いた方がよい」、選材段階で「これよりもこっちのほうが必要だ」などの意見を出し合うことができる。

2点目は、書く必然性と意欲を高められることである。本單元では、自分たちの失敗を繰り返させないために書くという設定により、書く必然性をもたせることができた。また、来年度の1年生、つまり、自分たちの後輩が読むという設定にしたことにより、先輩としての意気を感じる姿が見られたことは副次的な効果であった。

(2) 思考をうながす制限や条件

制限や条件がなければ、必要と思われることを全て書けばよいので、書く内容を精選しようという発想にはなりにくい。字数は800字以内、写真は1枚以内、書く対象は来年度の1年生という条件と今年のような失敗を繰り返させないという目的によって、書く材料を比較して、条件や目的に照らし合わせて取捨選択するという段階が生じる。この時に「その情報は相手にとって本当に必要なのか」、「それはどんな役に立つのか」と問いかけることにより、思考・判断が活性化する。また、その思考・判断は言語内容と言語形式を往復することになるので、国語科の本質を追究することにもつながると考える。



完成した報告文

実践事例 2

第3学年「B書くこと」の実践

1 単元

説得力のある意見文を書こう—代表として書く—

2 国語科の本質と本実践の関わり

国語科の本質とは、「言語の能力」を高めることであり、そのため国語科の授業では、「言語を大事にしながら言語（内容と形式）について思考・判断し、言語で表現させること」を必須としている。本単元では、説得力のある意見文を書くためにどのような内容をどのような形式で表現すればよいのかを繰り返し考えさせていくことで本質に迫る授業を展開しようと考えた。

そこで、思考・判断について意識的に考えさせるために、全員が学級の代表として意見文を書くという設定にした。（この設定については「3実践（1）単元について」参照）個人で意見文を書くのとは違い、必然的に次のような思考・判断が求められる。

- ・学級全体の意見を踏まえて書く必要があり、自分の思いだけで書くことはできない。学級の総意と自分の考えが異なる場合も考えられる。中心となる内容をどう取り上げるか判断しなければならない。
- ・委員長が納得できるように、材料を選び、論を展開する必要がある。委員長は、ランキングを提案しているのだから、ランキングの有効性を一部認めたり、反論する理由を踏まえた代わりの案を提案したりする必要がある。
- ・代表という立場により、文章を書くことに責任が生まれる。代表としていい加減なものを書いてはいけないという意識で文章を書かなければならない。この意識が、内容や形式に関する試行錯誤を生み、粘り強く考えることにつながる。

また、代表として学級の意見を踏まえることには、必然的に他者の視点が内在されるというよさがある。代表という立場の設定が、多様な意見から必要な材料を選ばせることを可能にし、多面的に物事を捉えることにつながることを期待した。

さらに、授業では、単元を通して「読み手を納得させるためには、何をどのように書けばよいか」「そう書くことで何を伝えようとするのか」という問いかけを繰り返すことで、言語内容と言語形式の関係を意識的に考えさせることをねらった。

3 実践

(1) 単元について

全員が代表として書くという場面を設定するために、次のような課題を設定した。

図書委員会では、図書室の利用者を増やすために行う活動を考えています。委員長が今期の活動として「本の貸し出し冊数をランキングにすることで学級の競い合いを促し、図書室の利用を高めよう」という提案をしました。あなたは図書委員として、この提案に対する学級の意見を文章にまとめ、委員長に提出することになりました。図書委員長に提出する意見文を書きましょう。

図書委員と仮定した自分（書き手）が、「図書委員長（読み手）」に対して、「本の貸し出し冊数ランキング」に対する学級の意見をまとめ（内容）、委員長を説得する（目的）文章を書く。

本来ならば、意見の対立は社会生活の中にある出来事や認識に対して書き手が見いだすものであるが、本実践では対立を促すために意図的にランキング案を設定する。この課題設定は是非を問うものではあるが、代案や補足案が必要となることが予想できる。ランキング案の善し悪しで終わらず、提案性のある意見文を論理の展開を工夫しながら書くことが期待できる。

(2) 単元の全体の流れ（全7時間）

- 第1時 意見文を書いた経験を振り返り、意見文の学習に目標や見通しをもつ。
- 第2時 課題文を分析し、学級で話し合う。
- 第3時 話し合いのメモを基に意見文に取り入れるべき内容を選択する。
- 第4時 論理の展開を想定しながら、意見文に取り入れるべき内容を吟味する。
- 第5時 構成を踏まえて、意見文を書く。
- 第6時 選んだ内容が自分の書いた意見文にどう生かされているか分析し、推敲を行う。
- 第7時 班で相互評価を行う。学びを振り返りまとめる。

(3) 授業の実際

第1時 これまでの学習経験を振り返り、説得力のある意見文を書くときに入れるべき要素について話し合う。

生徒は、「根拠と理由を明らかにする」「自分の主張を明確にする」「具体的な解決方法を示す」など抽象的なレベルでは、意見文に関する知識をもっていることが分かった。しかし、4月に調査として書かせた意見文では、「反論理由がなく、代案のみ示したもの」「反対理由のみ

を示したものが見られた。知識での理解があることと実際にそのような文章を書けるかは別だということを意識させた。

第2時【集材】 課題文について学級の一人として話し合う。そのメモを取ることを集材活動とし、次時につなげた。

第3時【選材】 集材した材料の中から、意見文に入れるべき内容をまず個人で選び、どのような材料を入れるべきかを全体で話し合う。

第4時【構成】 選んだ材料をどのような順序で並べるか考えたり、材料を再度選び直したりする。

第5時【記述】 教師が提示した接続する言葉と文末表現を参考に、個人で記述する。

第6時【推敲】 4人グループで意見文を読み合い、材料や論の展開に着目しながら、アドバイスをし合う。そのアドバイスをもとに、推敲をする。

第7時【相互評価】 前時とは異なるグループで互いに意見文を読み合い、どこが説得力があるかカードに書き合い、交換する。また、本単元で書き上げた意見文と4月調査で書いた意見文を比較し、どのようなことができるようになったのか分析する。

4 実践に対する振り返り

(1) 「付けるべき力」を明確にして設定した「代表として書く」という課題条件

意見文における付けるべき力を「読み手を意識する力」「問題を他面的に捉える力」「説得力のある根拠（材料）を吟味する力」と考えた。その力を付けるために、「代表として書く」という設定をしたことが、どのように影響したかを振り返る。

第7時で学びの振り返りをワークシートにまとめた。「代表として書くことで、気づいたことや学んだことを書きましょう」という自由記述で、大きく分類すると、次のような感想・意見が見られた。

(%は1学級での割合)

- ①自分の考えと学級の意見、多数派の意見、少数派の意見をバランスよく入れる必要がある。(26%)
- ②多様な意見をまとめるのは難しい。(22%)
- ③偏らず、他面的にものごとを見る必要がある。(15%)
- ④読み手を意識することが大切である。(15%)
- ⑤根拠として体験を入れるとよい。(7%)
- ⑥その他 (15%)

話し合いで多様な意見が出されたことによって、一つの問題を他面的に捉えることができるようになった。また、多様な意見を踏まえて書くことの難しさを実感できたようである。意見文の学習では、反対の主張を想定して書くことがあるが、二者択一のようになってしまうがちである。しかし、社会における問題に対して意見をもつときには、必ずしも二者択一で考えられるものばかりではない。たとえ代表でなくても、意見文を書くときには、問題を他面的に分析する必要がある。そのため、本単元において様々な考え方があることを踏まえて、意見文を書くという経験として代表として学級の意見を踏まえて書くという体験は一定の効果があった

と考える。「付けるべき力」を明確にすることで、その力を身に付けさせるためにより適切な課題や手立てを検討することができるのではないだろうか。

(2) 話し合いでの「問いかけ」による思考の深まり

第3時【選材】の授業では、「読み手を納得に導く論理の展開を想定しながら、代表という立場を踏まえて材料を選ぶ力を高める」という指導目標のもと、「読み手を説得するためには、どの材料を選ぶとより効果的だろうか」という課題を設定し、課題解決のための話し合いを行った。話し合いで、教師が繰り返し「なぜこの材料を選んだの」と問うことで、生徒はその理由を説明することになる。その説明の中で「委員長を説得する」という読み手や目的を強く意識させるようにした。

〈授業での話し合い〉

A 「ランキングのために本を借りる」という材料を選んだ。単に提案を示すだけでなく、多くの人が納得する理由を示す必要がある。

教 いくつか反対理由がある中で、これを選んだ理由は？

A 実例として、実際こういうことが起きているという理由で選んだ。過去に起きた事例をもとにした。

B Aくんと同じ「ランキングのために本を借りる」と「本に親しむという趣旨に合わない」を選んだ。委員長は図書室の利用者を増やしたくて、ランキングをしようとしている。ランキングをしたらそれが達成できないと言えば説得力があったと思った。

Aの意見は、反対理由として実際に小学校で失敗した例を根拠に取り上げると説得力が増すという指摘をしているが、「多くの人」という漠然とした捉え方をしていた。しかし、もう一度説明することで、「過去に起きた事例」が説得力があるということを実感したり、AにBが付け加えをして、「委員長」の意図を踏まえた発言を

したりするという深まりが見られた。どうしてその材料が必要かを繰り返し問うことで発言者や聞き手の思考をさらに深め、より充実した発言を促していくことが実感できた。

また、生徒からの問いかけにも着目したい。

〈代案の話合いの中で、Cが発言〉

C 「マンガを置く」がいい。本を並べ変えるのは大変。タイムリーな本は1年後には時代遅れになる。人気のあるマンガの人気は続いていく。10年後も、人気は続いているはず。大変さも希望図書購入の手続きと同じくらい。あまり大変ではないからいい。

D 質問なんですけど、「本に親しむ」というのは活字ですか。活字だとCくんの案は当てはまらないんじゃないかな。

教 うーん、これは委員長の思いを確認したときになかったね。もし、活字だったら、Cくんどうするかね。Cくんはかなり「マンガを置く」がいいと思っているけど、今みたいにクラスの中で、「マンガはちょっと」「活字じゃないし」という人が多かったらどうする。

C うーん。みんなが大反対なら仕方ない。

話合いで、「マンガを置く」という代案を立てたCの発言を聞いていたDが、委員長が考える「本」の条件を教師に確認した場面である。生徒Dは説得する対象である委員長を意識して材料を選んでいることが分かる。この問いかけに「どうして『本に親しむ』の本が活字でなければならないか確認したくなったのですか？」と教師がさらに問いかけることで、材料を選ぶ際には読み手意識がいかに意見文にとって重要か確認することができるという切り返しの場面であったことが分かる。話合いでの生徒からの問いかけは、どうしてそのような問いかけが生まれたのか切り返してやることで、生徒の思考・判断を問うことにつながるだろう。本時では、そのような切り返しはできなかったが、Cに「もし、活字だったら

どうする？」と問いかけた。Cは「代表」という立場を意識して、自分がいいと思っても学級全体がよくないと思っている場合、自分の意見を押し通してはいけないという考えをもっていることが明らかになった。

「書くこと」の学習は、個別学習、個別指導が中心とされるが、学習過程の中で学級全体で話し合ったりアドバイスをし合ったりすることが、「付けるべき力」を明確することにつながっていくと考えている。この単元で学習したことを踏まえて意見文を記述したところ、4月に行った記述調査での意見文と比べ、次のような変化が見られた。(ただし、4月調査は「個人」として記述したのに対して、本単元では「代表」として記述している違いがある。)

(%は、1学級でできた生徒の割合)

- ①反対理由と代案の両要素が入っている。(92%)
- ②実際に起きたことを例できるようになった。(46%)
- ③委員長へ寄り添う姿勢、ランキングの利点を入れるようになった。(56%)
- ④中心的意見「(ランキングは委員長の目的と)本質的にずれている」「活動の趣旨は本に親しんでもらうこと」が書かれている。(82%)

①は「意見文に反対理由や代案がなぜ必要か」、②・③は「具体例や反対の立場の利点を入れることで、委員長を説得することにどのような効果があるか」を授業の中で繰り返し問いかけながら話し合った結果だと考えられる。また、④は話し合いの中で何度も出てきたキーワードであり、反対する理由も、代案も、委員長に寄り添うための文においてもこのキーワードが中心に書かれることで、文章に一貫性をもたせていた。今後も教師が思考を深めるような問いかけを行ったり、生徒が発した問いかけを全体に広めたりできるようにしていくために、付けるべき力を明確にして具体的な指導展開を考えていく必要がある。